

第2章 事例研究

第1節 きんたろう倶楽部による里山保全再生

1. 社会的背景

県の面積のうち約70%を山間部がしめる富山県。3000m級の山々が連なる北アルプス立山連峰が富山県全体を囲うようにそびえ、中央には広い平野、そして深さ1000mに到達する富山湾を持つという、ダイナミックな地形である。そして鮮明な四季と様々な動植物が見られる、自然豊かな県である。まるで城壁のような山々に守られるように広がる平野は、台風による大きな被害から守られるだけでなく、生活に直結した多くの恵みを山から受けている。毎年冬になると膨大な量の積雪をもたらす立山の雪は、深いところでは高さ17mほどにまで積もるが、夏になるとそのほとんどが溶けてしまう。その膨大な量の雪解け水は河川へと流れこみ、山から一気に富山湾までそそがれている。富山ではこの豊かな水資源を利用して市民の生活や産業がなりたっている。豊富な水資源を利用した例として、黒部ダムの発電は特に有名である。さらにアルミ産業や農業も盛んであり、とくに、水を多く必要とする稲作は盛んで、県の農業算出額にしめる稲作の割合は全国トップレベルである。また、ふもとの山々はたつぷりと地下水をためこみ、やがて長い年月を経て伏流水となり、おいしい水となって人々の暮らしをうるおしている。名水百選で選ばれた河川が日本一多いこともそれを証明している。とくに黒部川水系の黒部市は名水の里として知られ、また庄川水系の砺波ではミネラルウォーターの生産が盛んである。

このように、平野に住む市民は、山から遠く離れた平地にいながらにして、山からの恩恵をたつぷりと受け取って生活しており、山の存在は富山県民の生活にとってなくてはならないものとなっている。そんな富山の森はいま、どんな状況なのか。現在、富山県の人口の多くは平野部に住んでおり、山間部は過疎化が深刻化している。山間部から都市部への人口の流出は、戦後の高度経済成長とともに一気に進んだ。富山県では、戦後約60余年の間に約73もの集落が姿を消した。これらの集落はかつて、県内の河川上流域の山あいに散在していた。それぞれの集落では、炭焼きや養蚕など里山ならではの産業があり、その産業を利用して街との交流が行われていた。しかしエネルギーは時代とともに炭から化石燃料へと変わり、輸送網の発達により外国から様々なものが安価で手に入るようになってしまった。その影響を受け、採算が合わなくなってしまった里山の産業は衰えだした。そして経済成長に合わせて新たな職と安定収入を求め里山の人々は都市部へ流れていってしまった。そうしてしだいに里山からはにぎわいが失われていき、村がひとつ、またひとつと消えてしまうこととなっていった。人がいなくなってしまった里山は手入れされることがなくなりどんどん荒廃し続け、今ではすっかりヤブ山と化した山間部が多く見られるようになってしまった。かつてにぎわっていたころの里山を知る年代の人たちは、うっそうと草木が生い茂り薄暗く人が寄り付かなくなった里山を見てさびしさを感ぜずにはられない。

しかし、彼らだけの力では整備もままならないのである。なぜなら、かつての里山を知る人たちはすでに高齢化しており、後をつぐ若者ももはや山にはいないからである。個人の力で限界があるならば、行政が整備に力をいれるべきなのだろうが、これもすすまない。す

すまない理由のひとつには市町村合併がある。現在の富山市は2005年に7つの市町村が合併して生まれた。行政が大きくなり集約されてしまったことで、里山整備という細かなところへの対応が合併前ほどいきわたらなくなってしまった。また、市民の里山整備への関心も薄いこともあり、とくに里山を知らずに育った平野部の市民や若者の理解が得られない。さらに、個人の私有林なのではないかという市民の思い込みも多くあり、行政が里山整備に関わることへの理解がすすまない。こうして、里山整備の重要性も早急性も認められず、緑豊かな富山県内において、里山の荒廃化がどんどん進んでいくことになった。

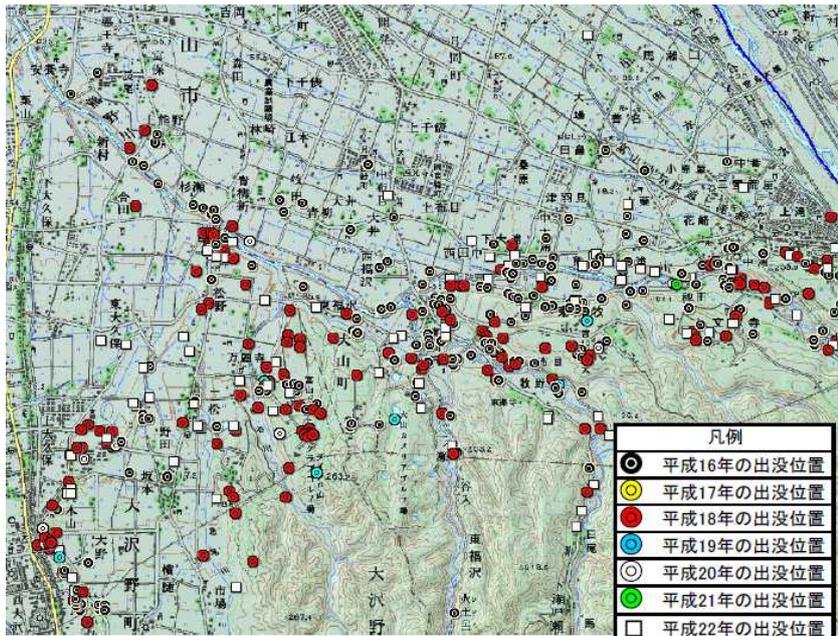


図1 クマツップ (富山市)

2. きんたろう倶楽部設立の経緯(初め)

平成16年の秋、この年は富山県内でクマが市街地に異常に出没した。民家付近に出没し、人間に怪我を負わせるという被害があいついでおこり、平成16年の富山県のクマによる人身被害は24件と、全国で最多となり、富山県内においても過去最多の件数となった。県では、「クマツップ(図1)」を作成し、クマの目撃・出没情報を地図上にとりまとめ、事態の收拾と人身被害防止につとめた。この年の出没件数は他の年に比べて異常に多く、出没場所も、山からずいぶん離れた標高の低い住宅地にまで及んだ。結局この年は100頭以上のクマが捕獲された。この異常事態を受けて、クマの異常出没の原因について、異常気象や餌不足などいろいろな原因が考えられたが、富山市ファミリーパーク園長より、“里山の荒廃と山の動物たちの関係”が理由のひとつとしてあげられた。かつて人が手を入れていた里山は、村と奥山の緩衝帯の役目もしており動物達が里山を越えて村へと侵入してくることはなかったのだが、現代では奥山と村とがつながっており、動物達は餌を求めて歩くうちに気づかず村へと出てしまう、というものだ。

その後、里山問題は一気に注目され、県内の団体や学識者たちの間で話し合われるようになった。そして、富山の里山で何が起きているのかを知ろうと、同年12月に地元紙で

ある北日本新聞社による連載企画「沈黙の森」がスタートし、富山県内における里山の現状と問題、里山再生の必要性について提起された。翌年には、同新聞社主催によるシンポジウムが県内でのクマの出没が特にあいついで見られた、南砺、大沢野、魚津の3箇所において開かれた。里山とクマ出没の関係に対する住民の関心は高く、シンポジウムは多くの参加者でにぎわい熱い意見が交わされた。そして同年5月には、「沈黙の森“変だぞ山が”徹底トーク」と題し、北日本新聞社、富山市、富山市ファミリーパーク、市民いきものメイトの主催で大規模なシンポジウムが開かれた。シンポジウム第4弾の開催ともなると、いよいよ里山の問題は市民にとって大きな関心事となり、このシンポジウムには約700名が聴衆として参加した。会場では平成16年のクマ異常出没をきっかけに浮かび上がってきた県内の環境の異変について、パネル展示などで紹介され、トークでは高校生から専門家までの参加者が、今後どのように活動していくべきかを活発に話しあった。そして富山における里山問題を理解した森富山市市長はこのシンポジウムにおいて、里山再生のためのボランティア支援組織、「きんたろう倶楽部」の設立を提唱した。

同年のうちに、市民有志による設立準備委員会会合が開かれ、翌年の平成18年4月には任意団体である「きんたろう倶楽部」が発足した。設立後はまず、もっとも荒廃化が著しく進んでいる竹林の整備作業から活動を開始した。その活動資金は富山市や企業からの助成金でまかなわれていた。しかし助成金の期限切れなどが近づき、活動維持のために必要な継続性のある資金調達が難しくなってきた。そのためきんたろう倶楽部をNPO化することで、これまでの活動を維持しながら、新たな事業にも発展させ、活動の幅を広げつつ資金面の調達をしていくべきではないか、という案が会員内で話し合われた。そして平成23年5月にNPO法人としてのきんたろう倶楽部が再スタートした。

3.活動理念と運営の体制

きんたろう倶楽部がめざしているものは、“山と街の参勤交代”システムを作ることだ。かつて、里山がにぎわっていたころ、里山には“なりわい”があった。炭を焼いたり養蚕したり、里山の自然の恵みをいかして生まれた資源を街に供給することで、それが里山に住む人たちの収入となり、人々の暮らしを担っていた。ところが始めに述べたような理由により富山の里山から人が離れていき、かつてのなりわいの賑わいはもうない。森が荒れば街も荒れる、森が元気になれば街も元気になるはずだ、もう一度里山になりわいを取り戻し里山と街をつなげたい。それがきんたろう倶楽部の想いである。現代に合った新しい形での、森と人との循環の環（わ）をつくり、森と街の両方が元気になれる里山を県内に作ることをめざしている。その目的を実現するため、4本の柱をたてて活動している。「森づくり」「人づくり」「地域づくり」「仕組みづくり」である。これら4つをそれぞれ育てることで、持続的な里山と街の循環を取り戻せると考えている。

まず、「森づくり」は、きんたろう倶楽部がメインとして行っている竹林や森林の伐採整備である。荒廃し、整備の手入れが必要な状態の里山に入り、木々の伐採や下草刈りなどを行い、整備をすることである。「人づくり」では、里山の重要性を理解し、未来に残していってくれる後継者を育てることだ。森好き人、森づくり人、森集う人が集まることにより協力して里山の再生・保全を継続していける体制をめざす。「地域づくり」では、元気をなくしている村に対し、再び里山に命を吹き返すための支援である。地域が自分たちの

地区にある森を自分達の力で維持管理し、さらには活用にまで至るよう、その支援を地域と相談しながら行う。「仕組みづくり」では、森と街との交流が持続して行われる仕組みを模索する。養蚕や炭焼きなど、かつて里山の恵みを活かして多くの森で行われていた産業も含め、現代の人々の生活に合った形でのなりわいを考える。

かつての元気な山の姿をとりもどすには、市民、企業、行政らが立場を超え、それぞれに出来ることを拡大し、隙間を埋めていかなければならない、と考えている。そのためのキーワードは「連携」「交流」「結合」「協働」であると捉え、あらゆる個人や団体などを結びつけて活動を行っている。そのために、積極的に地域、企業、団体などにつねに声かけを行い、里山再生のための協働活動を生み出している。これらの活動を運営する事務局側の人員体制は42名である。そしてきんたろう倶楽部として会員を持っており、正会員、倶楽部会員、賛助会員と、活動への関わり方によって3種としている。会員にはきんたろう倶楽部より活動の案内が届くようになっており、各自自由に活動へ参加をしている。この会員制度はNPO化する前から行っていたのだが、NPOとなった際に再度会員に入会の意味を問うた。そして、里山再生のために積極的に参加してくれていた会員等が引き続き入会し、現在約120名の会員が参加している。任意団体として設立してからNPO化するまでの五年の間に、里山再生のために積極的に活動に参加してくれるコアな会員が育ち、その会員達を中心に地域や企業などと協働しながら活動している。

4.活動内容と、支援または活用した地域資源

きんたろう倶楽部が立てている、「森づくり」「地域づくり」「仕組みづくり」「人づくり」の4本の柱をもとに展開している活動の内容と、それぞれにおける協働の様子を紹介する。(図2)

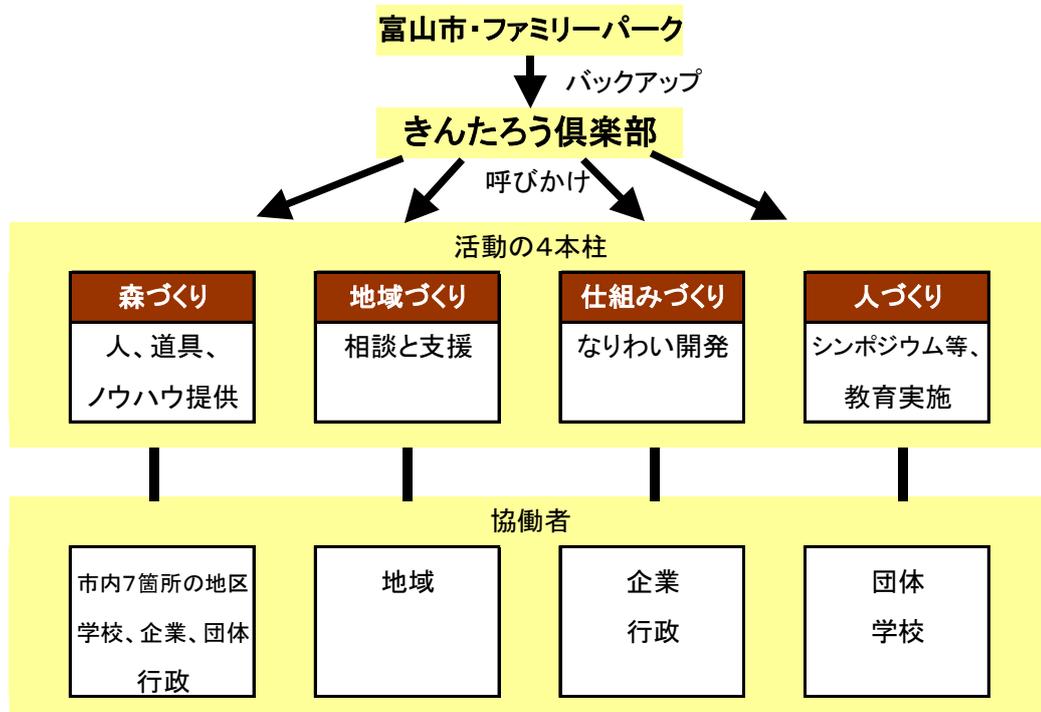


図2 活動と協働の流れ

1) 森づくり

きんたろう倶楽部は富山市内にある、荒廃した森林を持つ7つの地区（図3）を森林整備のための活動拠点とし、下草刈りや木々の伐採を行っている。その作業では、会員の他に地域住民や企業など、森に感心を持つさまざまな人たちとネットワークを組み森に人々をいざない、楽しく知恵と汗を出しながら行うことのできる協働になるよう活動している。7箇所の活動拠点とそれぞれにおける協働の様子を紹介する。①大沢野地区小羽、②婦中町ふるさと自然公園、③山田村地区市有林、④大山地区富山国際大学周辺、⑤楡原地区森



写真 1



写真 2

林公園天湖森、⑥八尾地区中核工業団地周辺、⑦呉羽地区きんたろうの森、であり、⑦以外はどれも地元住民の方からの要請によってスタートした。①の小羽地区の住民からは、子供達のために地元の小学校の上にある森林伐採し、その山から富山湾を望めるようにしてやりたいという、要請だった。②婦中町地区、⑤の楡原地区の住民も、地域の山に昔からある山道を整備して、人々が散策を楽しめるような楽しい遊歩道にしたいという要請だった。かつての里山の姿を知る地元の方々の、「地域の良さを子供達に伝え残したい」という想いによりスタートした事例である。(写真1、2) かつてその山に山道があったことや、裏山から富山湾が望めるなどとは、山に入ったことのない地元の子供達は知らないことだった。地域住民からの要請ではじまった協働活動は、このような、地域住民のふるさとの山に対する愛情から始まっている。里山を守りたい、という原動力は必ずしもなりわいのための作業ではなく、地元愛も大きな力となることを、活動を通して感じたようだ。作業を通して、子供達や若い住民にももっと愛着をもってもらえるような工夫が今後あっても良いだろう。また、④の大山地区や⑥の八尾地区は企業との協働で整備が行われている。③④⑤⑦の活動には地元の学校に参加を呼びかけ地域奉仕活動として参加してもらった。大人たちが子供たちへ技術指導なども行いながら、和気あいあいとした雰囲気の中で進んだ。

このように、きんたろう倶楽部発足後、森林整備作業はさまざまな団体との協働で行われてきた。参加した団体にはそれぞれのメリットがあった。まず地域。自分達の村に荒廃した里山を持つ住民としては、どんどん荒れ放題となっていく里山の姿を見続けることは苦痛であり、なんとか整備をしたいと思いつつもどうすることもできずにいた。その理由は、年々進む過疎化により作業を担う人手が不足していることと、現在の住民が高齢化していることである。地域だけで作業できなかった理由は、作業人員不足ではなかつ

た。それは道具である。森林伐採に必要な十分な道具が村には無く、買いそろえるための資金も無い。地域との協働でほとんどの村が真っ先に言う言葉は「お金がない」だった。人手も無い道具も無い、そんな中、きんたろう倶楽部による森林整備の支援は、道具も人員も無料で提供されるものであったため、地域は飛びついた。そして作業のノウハウを知ったきんたろう倶楽部の人間が作業の段取りまでも賄ってくれるのだから、地域にとってありがたい援助だった。村を存続させたい地域はこの共同作業で、森林整備のノウハウを学び、村に力をつけることができる良い機会と捉え積極的に住民が協働に参加した。

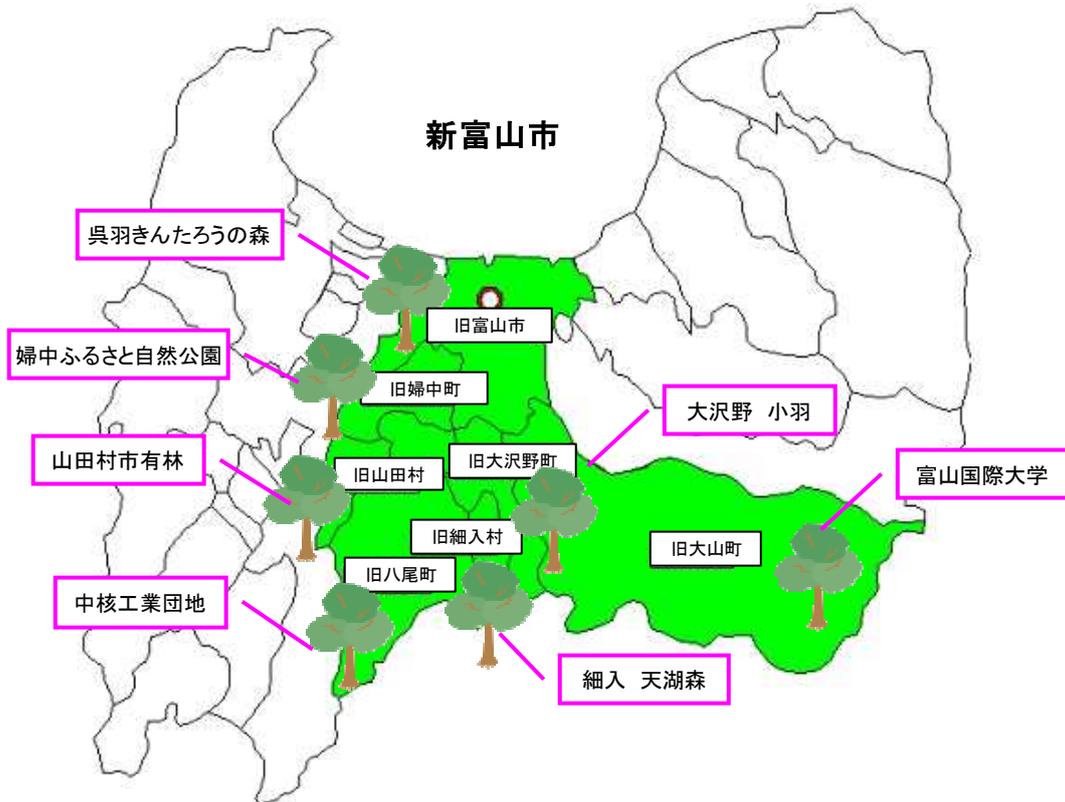


図3 森作りの活動拠点場所

そして企業との協働も思わずうまくいった。それは、企業側に協働に関わるメリットがあったからだった。地域に工場や作業場を持つ企業にとって、地域に良い企業イメージをつくり理解につなげたいと思っていた。協働に参加できたことでCSRの実績を作る事が出来たり、また大きな工場を持つ企業にとってはカーボンオフセットに利用したりする事ができたのである。きんたろう倶楽部にとっても、企業の参加は資金援助にもつながるため、相互にメリットが生まれた。大学が建っている山間部や、企業団地などなどを整備の対象としたことが、企業にとって協働しやすい場となったのではないかということだった。

それから、学校との協働ではきんたろう倶楽部も想像していなかったような効果があった。その地域にありながら、なかなか地域と交流する機会がなかった支援施設の子供達が、地域住民と一緒に作業を行ったことにより、地域と学校との距離感がぐっと近くなったようだ。そして少なからず持たれていた偏見も払拭でき、学校が次に地域交流を持つ足がけになった。また、中学校にとっても、地域奉仕活動としての場として好適であった。さら

に、保護者以外のたくさんの大人が活動に参加してくれることは学校としても安心感があり参加しやすかった。きんたろう倶楽部にとっても子供達の参加は、労働力の確保だけでなく、未来の地域の森を守ってくれる“人づくり”としての教育の場としても活用できた。作業の開始前に生徒達に対し、森林整備の重要性などを説明し、自分達の作業がなぜ必要なのかを理解してもらえらるような教育を行った。地元の山の良さを後世に伝えたい地元の住民と、未来の地域を担う子供達を、作業を通してつなぐきっかけを作ったことで良い異世代交流の場となった。地元の年配者との交流により、子供達は今まで知らなかった地元の事を発見し、かつての暮らしの知恵や技などを見聞きできた。学校との協働ではこのような効果を地域にもたらしたが、気をつけなければならないこともあった。学校は生徒を参加させるにあたり、最も気にするのが安全面だった。そのため、悪天候や熊出没などの状況によって突然前日に参加を取りやめることもあった。そうした場合でも、他の団体も参加する場合はたとえ予定通り行わなければならない、必ずしも計画通りという訳に行かないことがあった。

2) 人づくり

森の楽しさを知ってもらい森に集ってくれる人、森とともに元気になって森を好きになってくれる人、森の重要性を理解し森を守ってくれる人、を育てるために市民に啓発や教育の活動を行っている。さまざまなイベントやセミナーなどの活動を通し、里山再生、利活用を進めていってくれる人材が育っていくことで、次第に富山に元気な里山の姿が戻ってきてくれることを目標としている。まず育てたい人材は、市内7箇所の活動拠点を守ってくれる拠点リーダーだ。きんたろう倶楽部の森林整備は、単に地域の代わりに伐採作業をするものに終わるものではなく、地域の力で持続的に行えるような支援が目的であるため、地域にリーダーをおきたいと考えている。いつまでもきんたろう倶楽部が最初から最後まで指揮をとっていても、その拠点は、整備は保たれることはあっても、それ以上の利活用などに発展するまでには至りにくい。それぞれの拠点がチームとして独立し、独自の計画でもって活動をしていくには、その拠点内で重点的に活動をすすめてくれるリーダーが必要と考えているのである。

設立から6年余りが経過した現在、そのリーダーが生まれているかというと、残念ながらどの拠点にもいまだいないのが現状である。それぞれの拠点での森林整備作業にたずさわってくれる会員や地域住民はいる。毎度の竹林伐採や下草刈りの作業時にも作業人員は確保できており、現在のところ人手不足に悩まされるという状況ではない。その理由は、きんたろう倶楽部の会員には林業のベテラン陣が多くいるからだ。とくに、定年を向かえ時間が自由になったベテラン陣にとって、きんたろう倶楽部の森作り活動は腕の見せ所でもあり、仕事のような責任の重い任務というよりも、クラブ活動感覚で気軽に自由に参加できる場であることが、彼らベテラン会員にとっても参加しやすい環境なのではないかということだ。さらに言うと、かつての里山のにぎわいを知り、子どもの頃から森林に触れあってきた世代にとってみると、森には愛着がありその大切さも理解している。このように、森林整備の作業は昔から当たり前の必要な作業であるという認識を既に持っており、一から必要性を説明せずとも協力的に関わってくれる会員が多くいるのである。

当初、このベテラン会員の中からリーダーを選出しようと思った。しかしこの中からはリーダーになりたいと手があがることは無かった。作業は手伝う、しかしリーダーにはな

りたくない、そういう答えだった。この状態がしばらく続いているため、しだいに参加するメンバーが固定化してきており、さらに高齢化・減少化し始めた。この状態を打破しなければ、やがて伐採作業さえも参加者がいなくなってしまうかねないため、現在の会員の中からリーダーを選任するのをあきらめ、新たなリーダー候補の発掘・育成進めれば良いのでは、と考えた。しかし、林業にリーダー的に携わりたいという新たな人材は、そう簡単には見つからなかった。まして、若手では特にいなかった。若い人が参加してくれない理由は、林業に感心がある若者が少ない、または里山の重要性への理解の浸透が進んでいないということも考えられたが、現在の、ベテラン陣の固定化した雰囲気、すでに若い人の足を遠ざけているかもしれないとも考えた。活動を持続していくための人づくり。年長者の意見や知識・技術を敬いながら、若い人の感覚もうまく取り入れ、相互に協力し合いながら森の利活用と保全を担っていけるようになるためにはどうしたらいいのか、その明確な課題解決策はまだ見つかっていない。固定化したメンバーでの活動が続いている中、リーダー的人づくりが進んでいないことに対する焦り、活動の幅に対する限界、活動の維持に対する不安を感じている。

3) 地域づくり

森と街との間に人や物の交流が促進し、森と街の両方が元気になるよう、地域主導で自立して活動できるための支援を行っている。山間部をかかえる地域では、地元の荒れ果てた山をなんとかしたいと思っているところが多い。きんたろう倶楽部は、地域が自分達で里山を守っていけるための力をつけ、維持活用していけるための、サポート役として関わろうとしている。八尾地区大道での、森林伐採で出来てしまった土山の整備の例がある。この土山は地域にとって活用の意味を持たず、景観も損なう存在であった。そこで地域から相談を受けたきんたろう倶楽部が支援に加わり、相談の結果、水源涵養林としてこの土山を利用し村に豊かな水資源をもたらすことを目指して活動が開始された。森に木を植え、ゼロからの森作りをしたいという地域からの要請を受け、きんたろう倶楽部が支援に加わった。きんたろう倶楽部に全てを丸投げしてどうにかしてほしいという関わりではなく、地域主導で里山の整備活用にのりだしたこの八尾地区のケースは良いモデルケースとなった。きんたろう倶楽部の地域支援が少しずつ実績を積むにつれ、他の地域にも広がった。

地域からの支援要請で支援を行った例では他に、大沢野地区小羽もある。廃校となった小学校裏にある山を整備し、校舎も利用しながら地域で新たな何かを始めたい、という地域住民からの相談が寄せられた。まずはきんたろう倶楽部の支援により下草刈りや竹林伐採が行われ整備された。住民が協働してこの作業を行ったため、今後は地域主導で森林の維持管理は行っていけそうだが、森の利活用のための新しいことを始めようとする時、住民内での意見の相違などもあり、なかなか話が進まない。その場所に住み、住民同士が協調し合いながら暮らしていかなければならない住民にとって、意見の対立や相違によるトラブルは避けたいという思いがあった。そこに、きんたろう倶楽部が第三者的オブザーバーとして関わってくれることで、わだかまり無く話し合いの場を設けられると、地域としては期待している。まだこの地区では具体的に利活用の策は決まっていないが、きんたろう倶楽部は相談役としての関わりを続けている。

4) 仕組みづくり

現代の人々の暮らしに見合ったささやかな森のなりわいを見出し、森と街との間に、元気で持続可能な経済の交流をとりもどすことを目指している。きんたろうの森の竹林伐採で出た竹を事業に利用できないかと、平成 20 年に企業との協働で竹堆肥化実験を開始した。とにかく竹の成長の速さはすさまじく、毎年必ず伐採によって出てくる膨大な量の竹の処理はやっかいでしかなかった。それを里山の産業とすることができれば一石二鳥と考え、開発に乗り出したが、現在のところ不確定要素が多く（県の試験で合格しています）市場に出せる流れにまで至っていない。他にも竹チップにしたものを動物園の敷き藁にして、使用後も堆肥として再利用するなどの計画を現在進めている。竹が何らかの形でお金に変わるような、他との協働活動も模索中だ。里山の恵みを生かしたなりわいを再び生むための仕組みづくりがもっとも難しく、炭焼きなどかつてあったものは、現代のライフスタイルにおいて需要が少ない。持続的にお金につながる森の仕組みづくりはアイデア段階のものばかりでまだ運用開始に至っているものはまだない。会員との話し合いも行き詰っている状態だ。すぐにお金につながるわけではないが、なりわいを生む場としての活用も視野にいれながら整備に取り組んでいるのが「きんたろうの森」作りである。きんたろうの森とは、呉羽丘陵の一部の竹林であり、現在まずは憩いの森として活用できるよう、伐採などから整備を進めている。人々が集い安らげるような憩いの場をつくり、森と街との交流を、「癒し」によってつなげたいと考えている。かつての森のなりわいは形ある商品を街に売りに行くというスタイルだったが、「癒し」という空間を作り街の人が森へ足を運ぶ、というスタイルへの挑戦を試みている。しかし、これも森林整備は順調に進んでいるが、その後の具体的な利活用についてはまだ決まっていない。整備された森は少しずつ増えてきたが、それと平行して利活用のための具体的な仕組みづくりが進んでいるというわけではないのが現状である。

5. 現在きんたろう倶楽部が進めている協働活動とそのメリット

2011 年 10 月から、森づくり講座として「山にコウゾで文化おこし」という、和紙づくりの工程を体験できるセミナーを開催している。講師は県内在住の川原隆邦氏で、富山県朝日町の蛭谷地区に 400 年前から続く、国指定伝統工芸品の蛭谷和紙の後継者である。第 1 回目のセミナーで川原氏は、蛭谷和紙の歴史とその和紙の素晴らしさを参加者に語った。このセミナーは参加者に好評で、和紙づくりの連続セミナーに発展し現在も続いている。連続セミナーの内容は、“コウゾ”という和紙の原料になる木を山に植栽したり、コウゾの皮を蒸したり剥いたりという、和紙作りの工程を参加者に体験してもらいながら、森となりわいの関係を知る内容のものである。この活動は現在、川原氏、市民いきものメイト、きんたろう倶楽部の、1 個人と 2 団体の協働で行われているわけだが、この協働の中には、参加することで得られるそれぞれのメリットがあった。

地元の和紙作り産業を残していきたい川原氏は多くの問題を抱えていた。朝日町蛭谷は朝日町の山間部に位置し、緑豊かな山村である。しかしここ蛭谷も過疎化によって住民が激減しており、現在、村の建物のおよそ 1 / 3 は空き家で、残る家も高齢者の独居住宅だ。村に人がたくさん住んでいた頃、蛭谷は和紙業をなりわいにして栄えていた。しかし、戦後の高度経済成長による時代の移り変わりの波を受け、国内の和紙業と共に蛭谷の和紙業も廃れていき、今ではとうとう最後の後継者となってしまった。和紙業の衰退とともに人

がいなくなった蛭谷の山はどんどん荒廃を続けていった。蛭谷和紙を受け継いでいくためには、解決しなければならぬ問題がたくさんあった。第一に、和紙の原料となるコウゾの確保である。かつては蛭谷の里山では、原料の栽培から紙すきまで、和紙になるまでのすべての生産工程が地元で行われていた。今、かつてのように蛭谷でコウゾの栽培を行おうとすると、森林の伐採作業から取り掛からねばならず、集落の人手だけでは不可能だった。原料を植える場所、人手などをもとめ、地元の行政に支援を要請したが、個人に対する支援は難しいという理由で行政は動いてくれなかった。自分で出来ることの限界はすぐにやってきた。そんなとき、富山市ファミリーパークからの紹介で、川原氏は市民いきものメイトときんたろう倶楽部と出会い、1個人と2団体の協働が始まった。

きんたろう倶楽部という団体と協働することで、富山市からの支援が得られやすかった。そして現在、富山市の森林の一部を借り、きんたろう倶楽部の森林整備の支援をもらいながらコウゾの栽培場所を確保できた。さらに、連続セミナーでは参加者と共にコウゾの植樹を行った。このように、この協働に関わったことによって原料だけでなく、原料生産のための土地や、栽培のための労働力まで手に入れることができた。また、セミナーでは原料栽培から紙すきをして和紙となる工程まで、多くの一般の方々に参加してもらうことで、蛭谷和紙を広く市民に知ってもらうきっかけとなり注目してもらえることとなった。セミナーを通して出会った人たちには、この和紙の良さや産業として残していくべきとの想いを共有することができ、次の新たな支援者との出会いにもつながっている。こうしてきんたろう倶楽部との協働は、個人ではかなわなかったような様々なメリットが得られた。

次に「市民いきものメイト」の協働によるメリットについて述べる。市民いきものメイトは富山市ファミリーパークを拠点に、人と自然・いきものの理想的な共存の関係構築をめざす目的で、イベントを開催するなど様々な活動をしている任意団体である。今回の協働の中では、セミナーに参加する子供達やその親に対し、里山の自然の恵みや、そこに住む生き物たちが人間の暮らしにどれだけ関係が深いものであるか、ということをお教える場として利用できている。“なりわい”とは何かを知らない子供達に対し、コウゾという里山を利用して生まれた資源から和紙という産業に代わり、これを街に売りに行くことで、かつては山と街との交流がなされていたとうことを、セミナーでの体験を通してわかりやすく教えている。人の生活と自然の恵みによる関係を知ってもらうための、良い機会として活用できている。さらに、コウゾの栽培や刈取りなどを通して、参加者に森に入る機会をたくさん与えることで、森が変わっていく様子リアルに見せる事ができた。荒れ果てていた森の整備をすすめるうちに、戦後間もない頃のものと思われる炭焼き釜の跡が見つかったり、茶畑があった痕跡が見つかったりした。さらに、森に住む動物達も帰ってき、そのことによる森の生態系の変化も教えることができたのは、市民いきものメイトにとって予期しなかった教育材料だった。普段と違う切り口のセミナーに関わったことにより、いきものメイトは和紙作り目的で来た新たな参加者にも教育できる場を持つことが出来たのである。また、こういった文化体験型のセミナーは集客しやすいため、それだけでも関わるメリットがあった。

最後に、きんたろう倶楽部にとってのメリットについて述べる。きんたろう倶楽部が得意とする活動は、森林伐採などの里山整備で、現在の会員もその作業を得意とする人員が多く在籍している。そのため、活動4本柱のうち森づくりと地域づくりはそれなりに順調にいった。しかし、先に述べたような理由などから、どうしても活動が偏ってしまい、人

づくりと仕組みづくりがなかなか思うように進まなかった。きんたろうの森を「癒し」というなりわいで賑わわせ、モデル里山にしようと森林整備を続けてはいるものの、その具体的な利活用の策はまだ決定していない。森を活用する方法を考える際、固定化したメンバーから出てくるアイデアには限界があるからである。そこに川原氏、という森を利用したい人との出会いがあった。「和紙づくり」という里山の利活用をしたい人を支援することは初めてのことであり、里山再生の仕組み作りがうまく進まない中で始まった協働だった。きんたろう倶楽部が直接行った支援は、コウゾ栽培の場所の環境整備とセミナー開催の集客のお手伝いだった。つまり、この協働の中にはうまく役割分担がなされていた。森づくりをするきんたろう倶楽部、里山活用の仕組みをすすめる川原氏、森に人が集い森を好きになる人作りをする市民いきものメイト。自分の目的を達成したいそれぞれの個人や団体が集まることで、きんたろう倶楽部がめざしている活動の形になった。これまでは、会員を中心に森の整備を行いながら利活用の仕組みづくりや人づくりについての活動を考えてきたが、今回のように森を活用したい側からのアプローチという逆の流れの協働から森作りや人づくりにもつながった、という良い結果を生んだ。今までの森林整備の実績が次第に人々に伝わっていき、森を活用したい個人にまで伝わったことが、この協働が始まるきっかけだった。それぞれ目的を持つもの同士が集まって始まったこの協働は、活動側も参加する側も楽しんで関わったのが特徴だった。

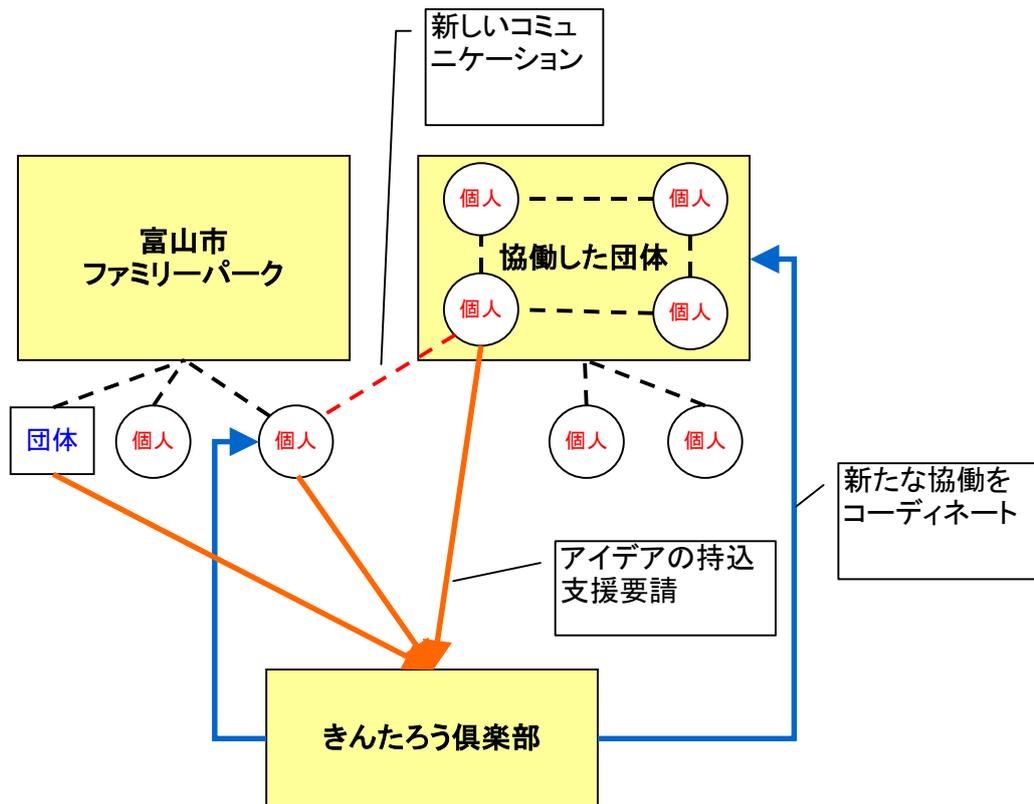


図4 個人への協働の広がり

6. 協働活動の成果と今後の課題

これまできんたろう倶楽部はさまざまな団体と協働で活動を行ってきた。富山市がパッ

クアップの体制を続け広報の手助けをしてくれたことは、多くの協働が生まれるための大きな理由であった。倶楽部主催の里山再生に関するシンポジウムに市長が参加したことなど、地元の団体や企業からの注目が集めやすかった。そうして倶楽部設立直後からたくさんの団体・地域・企業とさまざまな協働を持つことが出来たが、現在では協働の相手は個人にまで広がった（図4）。これまで協働を持った団体は個人の集まりであり、広報を手助けしてくれる富山市の先には個人の市民がいる。これまでの活動が個人へと伝わり、さまざまなアイデアを持った個人から支援の依頼、森活用のためのアイデアの持込まれるようになった。団体同士の協働では規模の大きな活動ができる利点があったが、個人のような小さな規模の協働にはユニークさがあった。そしてそのユニークなアイデアを支援することで新たな協働をコーディネートできた。個人という小さいけれどユニークで可能性を秘めた点同士のコーディネートへと活動が広がり深まった。

しかし、今後も協働を行っていくための力が持続できるかという面においては不安がある。（図5）。新しい会員の参加が増えず、メンバーが固定化してきていることは、活動維持のためのあらゆる面において問題だと感じている。若いメンバーの加入が無いと次第に人員は減少し、時代と共に精力的に活動する人員も育たず、中核的リーダー不在の状態が続いたままである。さらに、固定化したメンバー間で新たな活動に対する企画・立案をすることはアイデアの行き詰まりにもつながっている。NPO法人となった今、さらに活動の幅を広げつつ活動資金も調達しなければならない。倶楽部が会として存続し活動を維持していくため、さらに新たな個人や団体などさまざまな目的を持った点通しをつなげ、いろんな形の協働をどんどん進める必要があると考えている。そのために、きんたろう倶楽部は今後どのようにアピールをし、新たな協働の点を見つけていくべきかが課題である。

文献リスト

北日本新聞社（2005）「沈黙の森」

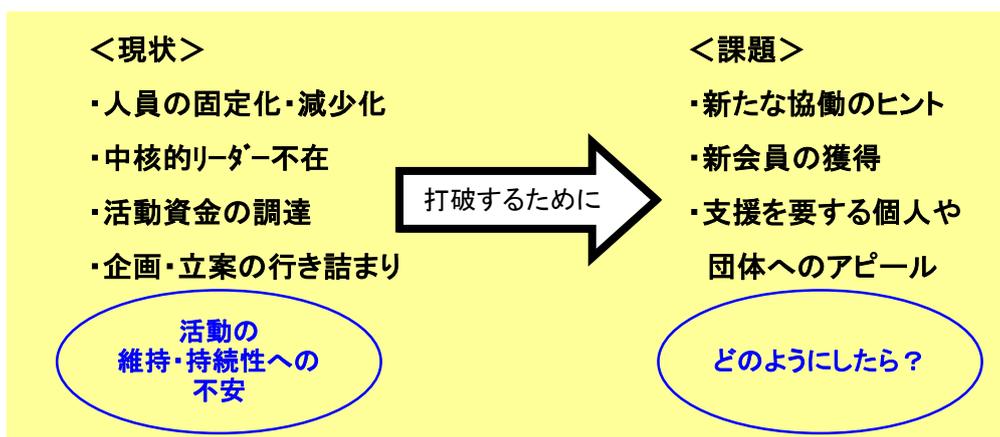


図5 現状の課題